

モサコケ時代

日野善太郎

前号に「運電と新聞と飯場」といふ、このものない話を書きましたが、あの中で食卓の良かった飯場の思ひ出、レストラン並みだったという歌麿橋の野地組。

そんなに良かったら長続きしそうなものなのに、実は一ヶ月たらずで飛び出してしまったのです。

その頃、私は尼崎市の城内という所に部屋を借りていました。尼崎にはその一年ぐらい前に流れついたのですが、何となくその土地柄が気に入ったし、友だちも出来たし、その友だちもすゝめてくれるので、尼崎に住みついてみたくなったのです。

さいわい部屋はみつかりましたが、荷物らしい物は何もありませんでした。ミカン箱一ぱいの本と、着替えが二、三枚、それだけだったのです。

勿論、なんていばれた話じゃありませんけれど、フト

ンさえなかつたんです。友だちの一人が三兩を一夜くれ

たので、一ヶ月間にはすのてました。

夏でしたから、それでもよかったわけですが、やがて秋になり、冬になったら、どうなるのだろうと心細いからりでした。

それというのも、金がなく、仕事もなかったからです。尼崎の友だちは金を貸す、仕事も世話するといってくれたのですが（だから尼崎に住みつく気になったのです）、いざとなると空約束に終りました。

私の友だちになるような人たちですから、同じように貧乏人で、あちこちに顔がきくような人たちではなかったのです。

で、たちまち暮しに困りました。その日その日の飯も、満足に食えないのです。とてもフトンどころではありま

せん。

土方ぐらしをやめようと、部屋を借りたのですが、こうなつては背に腹はかえられません。また、ちどの土方に逆もどりで。

そして見つけたのが、前にも書いた野地組です。重量が専門の親方でしたが、土方も何人か置いていました。単面は、たしか六百五十円ぐらいでした。しかし、月払いなのです。となると、飯場に入らないわけにはいきません。その日のエサにも困っていたから、通いではとてもやっていけないのです。

飯場に入れば、三度のエサにはありつけますし、諸式で煙草や酒、ちよつとした日用品はまかなえます。これではなんとかしのげると、ホツとしました。

けれども、せつかく清りたばかりの部屋を明け渡したわけではありません。電車賃も大したことはないの、夜はちよくちよく城内に帰りました。

白伏しますと、尼崎で出来た友だちというのは、文学同人雑誌の仲間なんです。みんな二十代から、三十になるやならすの熱っぽい連中でした。

私もまた、生意気にも、IPPバシ作家気どりで、何やらわけのわからんものを書いて得意になっていました。

下手の鉄砲も敵打ちやあたるで、たまには書いたもの

を仲間からほめられることもあります。するともう鬼の首を取ったように薄しくなってしまうんです。バカな話です。

もともと、おだてに弱い方ですから、いつの間にか、仲間へのせられて、同人雑誌の編集人を引き受けてしまいました。

吹けば飛ぶような同人雑誌でも、編集人となれば、それなりに忙しいのです。仲間の原稿を集めたり、催促したり、印刷屋と交渉したり、校正したり、その間に自分の原稿も書かなければいけませんし、

そういう仕事は、飯場では出来ません。やりにくいのです。

それに、自分が詩や、小説を書いている人間だということ、飯場の仲間には知られたくないのです。知られて特別な目で見られたくないし、自分から言いふらすことではないと思うのです。

同人雑誌の用事を片づけるために、自分の原稿を書くために、毎晩のように城内へ帰りました。それがいいなかつたんです。

こういうのは不自然だから、そのうち、親方なり、番頭なりに話して、通勤にしてみようと思っていました。しかし、それには何とか、まとまった金が必要です。

部屋代を払って、一ヶ月の食費と電車賃がなければなりません。酒も飲みたいし、本も買いたいし、その他、人間のくらしには、いろいろ必要です。

せめて、秋にそなえてフトン一組、どんな安物でも買わなければなりません。

だから、二、三ヶ月は辛抱して、少しでも金をためて、それから通勤に替えてもらおうと思つたんです。

野地組の食事がよかつたのも、言いそびれた原因の一つかもしれません。自分で外食したのでは、どうせロクなものはいくらでも思えませんでした。

尼崎の城内に部屋を借りていることは、親方にも、番頭にも話していませんでした。飯場に入るのに、そんなことをいう必要はないわけですからです。

番頭は何となく虫の好かない奴でした。妙に意地が悪くて、口を利く気にもなれない奴でした。向うでも私のことを、あまり心よく思っていないようでしたから、朝夕のあいさつ以外、なるべく顔をあわせないようにしていました。今から思えば、それもいけなかつたのです。

でも、こればかりは仕方ありません。人間の好き嫌いは、理屈ではないのですから。そして、眠る日のことです。

同人雑誌の仲間の集りがあって、仕事を休みました。

番頭には、本当のことはいえませんが、腹がいたいと仮病を使いました。ところが、それから三日めに、今度は本当に腹が痛くなりました。城内の部屋で目がさめたとき、あぶら汗を流していました。

三日前に休んだばかりです。また休むのはどうも具合が悪いと思いました。無理して飯場へ行きました。朝めしを何とか、かきこみました。やはりいけません。ひどい下痢なのです。仕事どころではありません。私は気が強い方で、意地っぱりですから、少しぐらいの病気で、へこたれないつもりですが、このときはかりは参りました。雑巾を放り出したように転がっている自分が、とてもミジメでした。

一時間もそうしていただいしょうか、少し気分が快くなつて、これなら起きられそうだなと思つてるところへ、ガラリとドアをあけて番頭が入ってきました。

いきなり

「われ、何してんのや」

です。

「腹が痛くて、下痢で……」

ボソボソ言いわけするのですが、こちらは声にも力が入りません。番頭はカサにかゝって怒鳴り散らしました。「仕事する気があるのか、ないんか。休んではかりいくさって、仕事する気のない奴はいらんのか。すぐ出て行けッ」

こっちに理がなくても、頭からガミガミやられると、ムカッとしてしまうのが私の性分です。まして相手は、ふだんから何となく虫の好かない奴です。

言いわけするのが厭になつて、黙ってしまいました。勝手にほざけ、豚野郎。

こっちのそんな態度は、かえって相手を刺激します。「毎晩、毎晩、どうろついてんのや。飯場で寝ていたことあらへんやろ。何も知らんと思つてゐるか」と、うたぐり深い目です。

その目が、お前、泥坊でもしてゐるんやないのか、と詰問しています。

グッとききました。こゝで一言、并解しなけりや何を言われるか判りません。

だがその説明は一言や二言では出来ないのです。まして、いきりたつてゐる番頭にどう話したらいいのか。そう思うと面倒臭くなりました。ひらきかけた口をまた閉じて、にらみ返しました。

「何やその目つきは。飯朝ばかり使いやがつて、お前のような奴は」

ここで私の押えていた感情が爆発したのです。

「いらんと言いたいのか。いわれなくてもやめてやらッ」こうなると売り言葉に買い言葉です。すぐ出て行くから給料を計算しろ。オオまっそれや。

番頭は足音荒く出て行きましたが、すぐもどってきて、明細書と金の入った袋を叩きつけるように渡しました。ロクに中も見ずに飛び出した。

「一と思ひますか。イエ、こんな時は意地になつてゐるか、かえって糞落着きにゆつくり袋の中を改めました。驚きました。もう少しあると思つたのに、五百円たらずしかないのです。すぐ出て行くから給料を計算しろと言つたとき、私の腹づもりではもっと多い筈だったので、もっと多いと思うから、親方の留守に給料を計算しろと言えは番頭があつてゐるだろう。そのあつてゐる様子を見てやろうと思つたのでした。

もっと多いと思うから、番頭がすぐ計算してきて、自分の小使いはあるだろう。この飯場を飛び出してゐるには困らない、というのが私の計算でした。それがナント、五百円たらずです。

番頭が、あつても驚きもしなかつた筈でした。あつて

向うが勝手に思いこんでいたのです。でも、面倒臭いからその誤解を訂正はしませんでした。

困りました。飯場をやめたことを言うわけにはいかず、家の人は新聞記者だと思ひこんでゐるので、毎日出勤するふりをしなければなりません。そうして仕事探します。

が、そう、うまく仕事が見つかるわけがありません。今度こそ、土方の足を洗おうと思ひましたが、世の中、こっちの思うような目が出ないように出てゐます。

コネはなし、学歴はなし、腕に職はなしの私に向く仕事はすぐには見つかりません。となると、もう一度飯場にもぐりこむより仕方がないのです。

第一、その日のエサ代にも困りました。金策のため、尼崎から梅田まで国道二号線をテクテク歩いたこともありました。

二人ほどの友だちに借金を頼みました。業界新聞の記者（これはホントの新聞記者なんです）は、コピーをおごつてくれたけど、借金の方はことわられました。

もう一人の友だちは西淀川の町工場で働いていました。金は貸してくれるといひましたが、今は持ち合せがないから、明日にでも現金書留で送つてやると言ひました。明日ではおそいのです。今日のメシ代、電車賃がないのです。

たのは私です。イエ、番頭の計算ちがいぢやないかと思ひました。明細書を穴のあくほど、じっくり見ました。計算に間違いはありませんでした。休みが多かつたし諸式や前借りを引くと、計算は明細書の通りで間違いありません。計算を間違えたのは私の方でした。十八年前の五百円たらずという金は、今の金になおしたらいくらぐらいでしょう。五千円ぐらいでしょうか。畜生、こんなことなら、と思ひました。

だが、何がこんなことならなのか自分でも判りません。そうして私は、雀の涙のようなゼニをにぎつて腹立ちまぎれに野地組を飛び出したんです。

それにしても、あるとき私は何に腹を立てていたのでしよう。鬼のように見えた番頭にでしょうか。腑甲斐ない自分にならぬか。それとも、まゝにならない世の中にでしょうか。

五百円たらずの金はすぐなくなりました。たちまちえの苦しみに迫られました。部屋代も払えません。

どういうわけか、私に部屋を貸していた素人下宿屋の人たちは、私のことを新聞記者だと思ひこんでいました。私は自分の職業について何も説明しませんでしたから、